キャラクター名: 七瀬　悠

プレイヤー名:

シンドローム	ブラム＝ストーカー サラマンダー	ワークス	ボディガード	カヴァー	身辺警護隊
オプショナル		年齢	28	性別	女
覚醒	憤怒	衝動	憎悪	初期侵食率	50 %
出自	犯罪者の子	経験	敗北	邂逅	ファンタズマ

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	1	0			4
感覚	2	0	0			2
精神	2	0	0			2
社会	1	0	0			1

HP	30
行動値	6
(非装備時)	6
戦闘移動	11
全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ			交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達		
運転：	2		芸術：			知識：			情報：裏社会	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
【05】実験体/ロストナンバー	P	N		
鋲狗	P　執着	N　不安		
UGN	P　執着	N 敵愾心		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
赤色の従者	1	5	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：	従者生成、判定－3D							
声なき者ども	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：	従者生成数＋Lv							
血の絆	2	3	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：	シナリオ間従者が消滅しない、Lv回/1S							
赤河の従僕	3	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：	従者能力値＋Lv							
血霧の盾	2	1	リアクション	-	-	対決	-	
効果：	C値－1、HP5点消費、Lv回/1S							
氷壁	1	5	オート	至近	自身	特殊	-	
効果：	攻撃の達成値を達成することで判定を強制失敗に							
リフレックス：サラマンダー	2	2	リアクション	至近	自身	-	-	
効果：	C値－Lv							
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

身辺警護を専門とする傭兵集団、通称「鋲狗」のただ一人の構成員であるフリーランスのイリーガル。物心つく頃には裏社会で幅を利かす犯罪集団によって格闘術や護衛術を叩きこまれる毎日を送っていた。商品として彼女を扱っていた周りの男たちは、不必要な暴力を振るうことや風俗紛いの仕事に彼女を売り飛ばすこともなかったが、愛情を育むなどといった経済的恩恵に結びつかない無駄な労力を割くこともなかった。彼女の家族代わりとなったのは、同じ環境で寝食を共にし、日々切磋琢磨した同年代の子供たちであった。普通の家族よりも長い時を共に過ごし、互いに依存しあうほかない環境であったからか、彼らとは親友以上の固い絆で結ばれた。そのようにして個体としての高いスペックと、阿吽の呼吸で同じ生物の四肢のようなコンビネーションを誇る身辺警護集団「鋲狗」は育て上げられ、育て親となった犯罪組織によって大々的に売り出されることとなる。「鋲狗」としての実力は確かなもので、並の刺客では裏社会の仕事では依頼者どころか「鋲狗」のメンバーにすら手傷を負わせることが叶わず、「犬を雇った」という情報をかぎつけた敵組織が暗殺から手を引くというのも珍しいことではなかった。そう、「鋲狗」向かうところ敵なしだったのだ。敵が人間だったうちは。

身体に衝撃が伝わり、1秒にも満たないラグの後に轟音が耳を劈く。瞬きの後、一面に広がっていたのは仲間たちの死体。依頼者だけは無傷で、かろうじて無傷であり、そこだけは矜持が保たれたと思ったが、どうやら違うらしい。風穴を開けられた胴体はみるみるうちに塞がっている。まるで怪物のようだった。遅れてこの衝撃波を飛ばしたとみられる男がやってくる。これ以降のことは覚えていない。なぜなら、事態を飲み込めずに錯乱した彼女は、仲間たちの血液を手で掬っては死体に流し込むことを繰り返していたからだ。両手から伝わる生温かく冷えた赤の温度はいまだに消えてくれない。

気づいたら彼女は、昨日まで仲間たちと過ごしていた宿屋へと帰ってきていた。黒服の破け目から傷ひとつない柔肌が覗いていることから、己もあの襲撃者や依頼者と同じような怪物になったのだろうと達観した。膝を落として、深呼吸をして…決意した。もう落ち着いた。混乱もしていない。…仲間たちはもう戻ってこない。そんな自分がすべきことは何か。仲間たちのためにできることはなにか。それは、仲間たちの死を悼むため、過去に囚われ続けることではない。それは、たった一人で明日からを過ごすため、過去を切り捨てることではない。それは、「鋲狗」の一員として、依頼者を守り続ける日々を続けること。たった一人でも。そのような決意を胸に、彼女は化け物の力を制御するため、FHがUGNから盗み出した冷たい溶液で満たされた培養槽に自ら身を浸した。

現在の彼女はフリーランスのイリーガルとして護衛任務を請け負っている。表裏どちらの社会の仕事も請け負っており、評判は非常にいい。その理由としてはSPとしての基礎が叩き込まれているうえオーヴァードの腕も確かであり、加えて裏社会で育てられ、仲間の多くを失った過去を感じさせない程、快活ながらにつつ